

子どもの瞳の中に

～すくすく広場の2年間～

感想文集



2019 年春

一般社団法人すくすく広場



もくじ

巻頭言

どんな子もわくわくして生活できるように	…理事長 坂本佳代子… 1
子どもの瞳の中に、未来への答えができる by すくすく広場 ～「子育て」と「子育て家庭」支援をめざして～	…丸山 綱男… 2
すくすくのあそびひろばに参加して	…鈴木 幸枝… 4
わたしと「すくすく」の活動	…石井かつ子… 5
学習支援を振り返って	…柳澤 和義… 6
すくすくは、みんなの“実家”	…山口 哲司… 7
「すくすく広場」の学習支援に参加して	…河野 京子… 7
すくすくの活動は、まさに命を守る活動だと思います	…赤嶺 菊江… 9
これからしたいこと	…浦部 牧子… 1 1
すくすくでの1年間	…石塚 洋子… 1 1
SKY FRIENDS	…金子 龍一… 1 3
今、子ども食堂が必要とされていると言いますが…	…戸恒 和夫… 1 4
羽生の杜と私	…田村 信征… 1 8
その子はちょっと誇らしげであった	…坂本佳代子… 2 2
伸びしろに期待	…杉沢 正子… 2 3
広めたい映画『こどもしよくどう』	…丸山 綱男… 2 4

講演会メモ

…記録・山口哲司… 2 9

2019年2月10日 於；パストラルかぞ展示室

講師；永遠瑠マリールイズさん

「大切なもの 命・平和・教育 ―子どもたちの未来のために―」

～ ルワンダの悲劇から学んだこと ～

巻頭言

どのような子どもも、わくわくして生活できるように

一般社団法人すくすく広場
理事長 坂本佳代子

私達の法人が加須市に誕生してから、丸 2 年余りが経ちました。「子ども食堂」を合い言葉にボランティア希望者が参集しましたが、蓋を開けてみたら学習支援希望者が予想外に多かったことが印象に残っています。お陰様で、一般社団法人すくすく広場は、学習支援を合わせて「あそぶ・まなぶ・たべる」をキャッチフレーズとして活動を始めることができました。

ここに 2 年間の活動報告をまとめさせていただきました。お目通しいただきましたら幸甚です。

現在、日常生活を営む私達は、合理性と利便性の恩恵を受けつつも、なんとも言えない虚無感や孤立感を抱え込んでいるように思います。同時に貧富の格差は広がる一方で、貧困は一生の道筋を制約する大問題になっています。

加須市には福島県双葉町の方々や、工業団地等で働く外国人家族、またどの地域とも共通に生活に窮している方々が居られます。

私達法人は、どのような状況の方も、そしてどのような子どもも、少しでもわくわくして生活できるよう、そしてお腹いっぱい食べられる生活ができるように、これからも微力ながらお手伝いしていきたいと考えています。

(2019/3/25)

子どもの瞳の中に、未来への答えができる by すくすく広場

～「子育て」と「子育て家庭」支援をめざして～

丸山 綱男

すくすく広場は、この2年間、子どもたちを地域社会の中で心豊かで健やかに育むために安全・安心な活動拠点（広場）を設けてきました。これを核として、親子が地域の人たちと知り合い、地域の人も親子と知り合い、地域も恩恵を受ける図式を構想してきました。子育て支援をやることによって、地域のネットワークができ、新しいコミュニティ作りが始まる確かな道筋を探ってきました。すくすく広場の積み上げてきた成果と、今後に向けた私見を述べてみたいと思います。

1 「子育て」支援で成果を上げてきた“すくすく広場”

～地域社会の子育て力を問いながらの実践～

私の幼い頃は、各家庭では子どもを地域に放り出して、地域社会の子育て力に依存する形で育てるということが、子育ての基本でした。多くの子ども達が家から出て、夕暮れ近くになるまで横丁で遊んでいました。そこには、地域に巻き込まれた子どもの姿がありました。また、私の近所にはタンスや風呂桶の職人さん等がいて、その仕事ぶりに見入ってしまい、かんなどで削る感動を鮮明に覚えています。そういう大人に巻き込まれる生きた場がありました。文京区の根津神社の氏子であった私は、祭りが近づく大人が打ち出す太鼓に自分もやりたいなという憧れがありました。地域社会の大人に憧れていくということは、子どもの育ちにとってとても大事なことだと思います。仕事をしている大人にとって子どもは邪魔だったかもしれませんが、子どもを励ましたり、色々なことを教えてくれたりする大人には温かさがあり、地域には豊かな子どもを育てる力がありました。親は子どもたちを家の外に出して、子どもが自然と育っていくということに委ねることが最も大切なこととしていました。まさに、子ども自身が生きる力や知恵を身に付ける「子育て」でした。子どもたちは色々な遊ぶ力、それに伴う体のしなやかさ、体の丈夫さ、さらには運動神経、自律神経、けんかをしてもまた仲よく遊ぶというような社会性、我慢する力等々を、親が知らないうちにたくさん身に付けて「子育て」が成立しました。

さて、すくすく広場の2年間の活動を顧みて、「子育て」支援にどの程度関わったかを問い直してみたいと思います。我々スタッフが幼いときに経験した遊びや学びが参加した子どもを巻き込み、子どもと一緒に精妙な仕掛けを持ったおもちゃ作りをする等、「子育て」を試行錯誤しながら支援してきたように

思います。すくすく広場は、地域の「子育て広場」となってきたのではないかと考えますが、どうでしょうか。すくすく広場に集う子どもの瞳の中に、未来への力強さを感じています。

2 「子育て家庭」支援を充実させる鮮度のよい“すくすく広場”

～家庭内で一手に引き受ける地域社会の「子育て」と家庭内の「子育て」～
先ほど一部述べましたが、私が幼い時には、昼間は家から放たれて地域で生きる知恵を授けられて、夕方には家庭にもどって手伝い等の仕事に巻き込まれる生活でした。食事づくりも手伝いながら、親子で生活文化を共有していたので、親の子どもへの関わり方も存在していました。家庭における「子育て」が、他の人の支援がなくとも家庭内で成立していました。

今は地域住民同士のつながりも希薄になり、子ども自ら生きる「子育て」の社会的環境が少なくなっています。親は地域社会の子育て力と家庭内の「子育て」を一手に家庭内で引き受けることとなってしまいました。ひたすら子育ては家庭内で行わなくてはならなくなり、核家族中心の現代において、親子の関係も窮屈になり様々な課題が噴出する状況になってしまいました。子どもを手伝わせて育てることが減ってしまい、子どもを巻き込んだ家事を通しての子育てという形がなくなってきました。

そこで、すくすく広場として親の家庭内における子育ての負担と苦悩に対応すべき支援を今後どうしたらよいのか考えてみました。

一つ目は、家庭の文化を親子協同で創造していけるミニプランを進めてみたいと思います。具体的には、すくすく広場で子ども達を今まで以上に、料理作り、配膳の手伝い等に関わらせたらどうでしょう。また、子ども達に次回の料理をデザインさせる“献立ごっこ”等も導入してみたらどうでしょう。子ども達が、すくすく広場で得た技を家庭で発揮できれば、子育て家庭支援の一助として親子関係のぎすぎすさも減るはずだと思います。

二つ目は、子育て家庭に鮮度のよい情報を提供したいと思います。今までも、すくすく広場としては、子育ての悩みを受け止めてきた実績がありますが、地域における子育ての状況や現代社会における子育ての問題点（市・県・国）を、参加された保護者の皆さんに情報提供してはどうかと考えます。具体的には、毎回、ポイントを1つに絞って簡潔明瞭なカード形式で手渡してみてもどうでしょうか。親同士のつぶやき等は次の回に掲載するなど、すくすく広場が「子育て家庭支援」の最前線にいることを広めたいと思います。

3 地域の子どもへの恩送り ～私の使命～

以上、2年間の成果と今後の取り組みの2点に絞って私見を述べましたが、私自身“すくすく広場”に参画して、自分自身が「やりがい・居がい」を習得できたことは人生にとっての輝きとなっています。それができたのは、すくすく広場の趣旨にご賛同いただている会員の皆様、現場で創意工夫して力を出し合ってきたスタッフの皆様、参加される親子の皆さんのお陰様と感謝しております。

「恩返し」は誰かの恩に報い、「恩送り」は受けた恩を誰か他の人に送ることとされます。我が人生は、多くの方の恩を受けて築くことが出来ましたが、返せていない恩が胸につかえます。今こそ、地域の子どもへの恩送りを糧として、今後も歩んできたいと思います。



すくすくのアソビひろばに参加して

鈴木 幸枝

初めてすくすく広場に参加した時は、何人子どもが来るかもわからない状況で、スタッフの方が多かったように覚えています。参加する親子が増えて来て良かったと安心して来たら、今度はスタッフが足りなくなり、てんてこ舞いの状況となってしまいました。戸恒さんが申し込みの調整をすることになり、お断りする方も発生してしまうほどの現状です。今後のすくすく広場の参加者とスタッフの確保が最大の問題と感じています。

私は、調理を主に担当させていただいています。浦部さんと献立の相談をして、交代で食材の用意をしていますので無理なくやって来られました。時には、足りない材料の買出しに走ったこともありましたが、何とか食事を出す事ができました。

丸山先生が作った新鮮な野菜があるので、本当にヘルシーな献立を提供することが出来ています。すくすく食堂では、野菜不足は考えられません。今後も、参加者の皆さんに食べたい物について聞いて、子どもに喜ばれるおいしい野菜たっぷりメニューを考えたいと思っています。

2月から開始時間を遅らせて、調理の準備を遊びのメンバーが手伝うようになり、だいぶ余裕が出来ましたので、これからは、調理担当も親子と一緒に食事をして、遊びにも参加したいと考えています。

わたしと「すくすく」の活動

石井 かつ子

私の世代（70代）以上の人たちの多くは、ボランティア活動に対して、「自分自身の生活にも問題をかかえているのに、えらそうに他人の面倒をみて」と揶揄する考え方を持っている。わたしの中にも同じ考えがそれなりにあった。一方、「先がないのに他人がどう思うか気にする必要はない」とか「えらそうにしなければいいんでしょ」などと思う自分もいる。しかし、活動を始めると、そんなことはどうでもよくなった。目の前に、喜んでくれる大人や子どもがいる。これは、絶対的な価値あることだと思うと、簡単に偏見が消えてしまった。わたしの「すくすくの活動」は、そんな底辺のことから始まっている。

活動の主なことは、月一回の遊びの広場の提供と週一回の学習支援活動。前者の私の役割は、料理作りのお手伝い。大勢の人の分を作るので大変なこともあるが、なんとか楽しくクリアしている。またこの会の食事をグレードアップしているのが、新鮮で安全な野菜を毎回提供してくれる仲間がいること。誇りを持って食事作りができる。わたしも、野菜作りをしている。安心な食を家族にと。大変さ7割。でも収穫時になると喜びが10割以上になるので続けられている。大変な思いをして作っていることが分るだけに、惜しげもなく毎回提供してくださる心根に敬服してしまう。

後者の週一回の学習支援は、小学生が私の担当。当初は、自分がまだ誰かのためにできるという期待を膨らませ、甘い夢を描いて参加した。職業としてやってきた頃の状態が目の前に繰り広げられるものと思って。ところが、老人の支援者が子どもに認められるには、時間と努力が必要だと思い知らされる。子どもたちの言葉や態度は、かなりストレートで厳しい。この子等といかにしてつながろうか思いめぐらす日々が続く。

20年位前になるが、学級崩壊したクラスを担当する教師がいなくて、希望して持ったことがある。そこで学んだことは、前向きに取り組むと開ける道があることと、きちんと子どもたちと向き合うことの大切さだった。久しぶりにあの頃の情熱がよみがえってくる。（これは、感謝すべきことだろう）

わたしなりに考えたことは、食に目を向けることだった。なぜなら、主婦は、食を握ることで家のなかでの力を持つことができる。実感済みのこと。一番簡単で成功率が高いはず。おやつ作りから始めて、コロッケを作ってみたり、アップルパイを作ったり、ふかしイモを作ったり（これが意外と人気があった）、今では、いも御飯のおにぎりが人気がある（友だちからお米の支援をもらって）。学習会の空気が少し違ってきたことは事実だと思う。そこから子供の置かれている状態も実感できてくる。もちろん私だけの努力ではない。仲間の人たちの努力

もあつてのことである。

はっきり子どもの態度が変わったのは、仲間の数人が親と話し合ったことだと思う。わたしが考えた行動は、邪道かもしれない。でも、邪道があつて正道が通りやすくなる。人間社会は単純なものではないから。それになにより、おいしそうに食べる子どもの笑顔は、心を和ませてくれる。まあ、いいかなと思っている。

この三年間、子どもたちに大人がそれぞれの良さを出しあつて過ごすこの時間は、素晴らしいと思っている。いつまでも続いて欲しい。

これからも私自身が、少しでも長く活動が続けて行けられるよう頑張りたい。



学習支援を振り返って

柳澤 和義

すくすく広場の戸恒さんより今までの学習支援で何か気が付いた事があればとの原稿依頼があり、拙い文ではありますが、私なりに纏めてみました。

学習支援は平成29年の5月からで、その3月で、教員生活が終わりました。地域に係わる事で何かお役に立つボランティア活動を探しておりました。其の頃、以前より日本語の会でお世話になっております河野先生からのお誘いがありました。大変感謝しております。と言うのも生徒相手の活動を希望していたからです。職場では高校生が対象でしたが、今度は小学生もおりました。接し方が分からず戸惑いましたが、直ぐ慣れました。基本を押さえて教えればどの子も同じでした。先生方は、経験豊かな小、中、高、大学、社会人と多士済々です。担当科目は、英、国、数、理、社とほぼ全科目をカバーできました。私達の活動に賛同し、協力して下さる方々が増えてきました。活動は毎週木曜日、市民プラザ5階、4階で午後5時から7時まで、生徒の自主学習の支援をしています。学校の宿題、自主課題、入試問題などに取り組んでいます。当初はおやつを食べながらの子ども達でしたが、今では、休憩時間中に先生方の持ち寄りでの軽食になりました。このことで、けじめが付くようになりました。また、夏休み中の

昼食を挟んだ3日間の集中学習、春休みの英語合宿2日間などを実施しました。学習支援の諸課題については、先生方と話し合い、解決策を施行錯誤しています。

すくすく広場の活動は多岐に渡ります、私の役割は今のところ、学習支援ですが、他の先生方は、2～3か所を担当しています。この広場では、かなり具体的な取組み、行動が多々あります。私なりに出来る範囲でこれからも活動が続けたいです。学習支援を通じて、生徒、保護者、地域の方々、そしてすくすく広場に係わるすべての皆様と共に歩んでいければ幸いです。

すくすくは、みんなの“実家”

山口 哲司

たった一年ですが、すくすくは、「若い子育て世代の新しいライフスタイルの一環」に位置しているのかなと思いました。子育て世代が地域と疎遠になったり、PTA(組織)に溶け込めなかったり、実家が遠かったりすることは珍しいことではありません。お試しで参加してみた「すくすく」が、地域であったり組織であったり、実家観があったりするんですねこれが。実家観があります。このスタッフの皆さんには。何となくただいまと帰ってきた不動岡公民館です。社会の何も変えられなくても、皆さんの一環に位置づけることが「本物」として長く活動ができていくのかなと思います。



すくすく広場」の学習支援に参加して

河野 京子

「すくすく広場」の学習支援委員長としてこの3月で2年間がたちました。と言っても委員長は名ばかりで、全体をどう引っ張るかの構想もなくただ教えるのが好きというだけでやってきました。ところが、ここ半年位、英語を質問する生徒が本当に少なく、石塚さん、庭山さん、私の三人はいつも開店休業に近い状態です。英検が近づいて勉強しているのを見かけたりすると、生徒以上に私達が目を輝かせてしまったりします。

どうしてこうなってしまったのか思い当たる節もないではありません。昨年秋、小学生と高校生の学習態度があまりよくない時があったので、学習支援の

ボランティアが話し合いをもちました。小学生に関しては親と話し合う機会を持ったりしているうちに少しずつ落ち着いてきたように見受けられます。高校生についてはこの後続けるかどうか2週間休んで自分でしっかり考えてくるとと、質問することを約束させました。ところが再開しても勉強はここでやってわからないところをすぐ聞くという形は変わらず、私などに聞くのは少し後ろめたい気持ちがあるのかもしれませんが。柳沢先生のように高校生の脇にどっかり座っていると聞きやすいのかもしれませんが。自然と数学の勉強が多くなっているように見受けられます。

学習支援を始めたころは、ちょっとしたお菓子とペットボトルの飲み物を買ってもって行きました。これだけでは足りなかったのか子供達もそれぞれお菓子やパンなど買ってきて食べていました。そのうち、石井さんや石塚さんが家庭菜園などで取れたさつま芋やにんじん等を蒸したり、炊き込みご飯のおにぎりにしたり、蒸しおまんじゅうにしたりと手を加えて持ってきてくれるようになり、子ども達のはじめ食べられない物に遠慮がちでしたが、今ではよく食べることにすること。また、市内のパン屋さんからフードロス削減のためパンがもらえるようになりました。これにもボランティア手作りのカスタードクリームや玉子、ポテトサラダ、生野菜等が用意されパンにはさんではおぼります。6時から約20分間、みんなが一緒になって無心になって食べているひとは、何にもかえがたい幸せな時間だなあと感じます。

高校生が制服にもかかわらず口紅をしっかり塗っていることには、ボランティアをはじめ、小・中学生も内心批判的です。私も幾度となく注意してきましたが、もうこれ以上は何も言わないと決めました。かと言って是認している訳ではありません。私が時代遅れなのか、外見で人を判断しているのか、その日帰ってからいつも自問します。彼女たちがバイトなどで商業主義の渦の中に巻き込まれすぎたらいけないとか、推薦入試の面接にもあの口紅で行くだろうかなどとも考えます。けれども彼女たちはもう十分に自分で考えて行動する時期にきています。なんといってももう今年は選挙権を獲得する年です。人から言われるのではなく自分の心と対話できる人に育っていつてもらいたいし、それを見守っていききたいと思っています。

子ども達の行動でイライラしている自分をみて、もうそれは現役時代で十分だったはずなのに…と苦笑します。けれどもそんな子ども達のちょっとした変化に元気をもらったり、子ども達の生きているこの社会に、まだ共に生きているのだと実感できる、またとない機会を与えられているのだと思っています。

すくすくの活動は、まさに命を守る活動だと思います

赤嶺 菊江

私がすくすくの活動を始めるきっかけは、双葉町の方達の寄り添い場所加須ふれあいセンターで、坂本さん達がピエロ遊びの広場を開催した時にお手伝いさせてもらった事でした。

市内の保育所で保育士をしていましたが、53歳の時に癌を、その後腸閉塞を繰り返し、永遠ではない生命を強く意識し、ならばこれからの人生悔いの無い時間を過ごそうと、57歳で早期退職をしました。

現役の頃からずっと気になっていたのが、福島第一原発事故後加須で避難生活を送っている双葉町の方達の事でした。退職後、何かお手伝いをさせてもらいたいと考えていました。何をしたら良いか分からないまま、ふれあいセンターでお手伝いを始めました。ピエロ遊びの広場の活動は、双葉町の方達がスーパーアリーナに避難して来た翌日から始まり、多くの支援活動が消えていく中でずっと支援をし続けている活動でした。

私もそうですが、大切な事を人は直ぐに忘れてしまいます。事故直後は原発事故の恐怖を思い知り、故郷を追われ避難生活を余儀なくされている方達の苦しみにも多くの人達が寄り添いたいと思ったはずでした。しかし、あっという間にその思いは薄れ、あのとんでもない事故はなかったかのように、放射能で汚染されてしまった福島に、もう大丈夫だから帰れと次々と保障を打ち切れ、帰還指示の下、不安な思いを抱え福島に帰らざる得ない人達が生まれました。

また、テレビでは連日のようにオリンピック！オリンピック！と騒がれ、益々あの事故は忘れさせられようとしています。そして、悲しい事に、多くの双葉町の方達が避難生活を送る此处、加須住民の中にも、心無い言葉を双葉町の方に向ける方がいると聞きます。

私は学生時代に部落差別の問題に出合いました。国は長い間、被差別部落の劣悪な環境を放置してきた責任を認め、同和対策事業をスタートさせました。学校や保育所でも、同和教育が積極的に取り組まれました。だからと言って、直ぐに問題が解決される訳ではありませんが、これらの取り組みで少しずつ改善されていたものもありました。

その事に対し、市民の間から「何故？あそこだけが良くなるの？」と、妬みのような感情が生まれました。長年放置され、基本的人権が保障されてこなかった被差別部落にやっと手が差し伸べられたのに、それらを理解する事ない市民達の感情から生まれた新たな差別でした。そして、今も尚、厳しい部落差別の課題は多く残されたままです。

何故人間は、こうも差別をしたがるのでしょうか？どうしたら、差別する側

からも、される側からも解放されるのか？私の長年の課題でした。

「格差社会」「子どもの貧困」問題は、保育現場にいた頃から感じ始めていました。バブルが弾けた後、子ども達の様子が徐々に変わっていくのを強く感じました。子ども達は常に家庭を背負ったまま保育所にやって来ます。経済状況の厳しさや家庭の不安定さも、子ども達を観ているととてもよくわかります。そして、それらの環境が子ども達の成長発達にどれだけ影響を及ぼすかも痛いほど感じていました。

格差や貧困が差別を生みます。そして、それは連鎖していきます。親から子へ、子から孫へと。

マリー・ルイズさんが「人間にとって一番大切なものは命。その次に大切なものが教育」と、話されていました。教育は豊かに生きるためにだけではなく、命を守るためにも不可欠と言うルイズさんは、ルワンダの内戦の中でとことん思い知らされたのだと思います。

その命を守るために必要な教育にさえ格差が生まれ、貧しい子はそれなりに…と言う風潮があると聞きました。何とすることでしょうか。

すくすくの活動は、まさに命を守る活動だと思います。まだまだ痒いところに手は届かずですが、目標とするものは貧困の連鎖を断ち切り、全ての子ども達に明るい未来を保障して行くというものだと思います。

こんな素晴らしいすくすくの活動の中で、私が担ってこれたのは本当にごく一部でしかありません。それも、支援しているはずの私が、逆にいつも助けられていた気がします。何人ものママ達に沢山の「ありがとうございます!」と、感謝の言葉を頂きます。その度に心がぽっこり温かくなります。引っ越しして来たばかりで不安な日々を過ごすママが、すくすくに来るとホッとすると言います。自分と同じ子育て奮闘中のママ達とも出会え、笑顔が少しずつ増えていく様子を見てみると、私も笑顔になれます。子ども達も徐々に慣れてくれたらしく、声を掛けるとニコッと笑ってくれたりします。ママがいなくとも、泣かずに一緒に遊べるようにもなれた子もいます。

支援して「あげる」のではなく、保護者の方達と一緒に子ども達の成長や発達を喜び、「子育ては大変だよね。本当にお疲れ様」そんなふうに寄り添いながら、出来るお手伝いをさせてもらいたいなと考えています。そのためにも、あまり力み過ぎず、ほど良い緊張感も忘れずにいたいと思います。

すくすくにはいろんな魅力がありますが、何と言っても美味しいご飯です。採りたて無農薬野菜に、沢山の愛情が注ぎ込まれたご飯は最高です。

そして、やっぱり素晴らしいスタッフの方達との素敵な出会いはすくすくの魅力の一番かも知れません。「世の中、まだまだ捨てたもんじゃあないぞ!」

「加須って結構良いかも～」と、思えるようになりました。世の中腹の起つことや、耳を塞ぎたくなるような悲しい事件が沢山あります。ただ嘆くだけでは何も変わらないので、自分に出来ることをこつこつとやっていきたいと思っています。勿論、楽しむことも忘れずに…。

すすすすのみなさん、これからも、宜しくお願いします。



これからしたいこと

浦部 牧子

まな板でしょくざいを切る包丁の音、ご飯の炊けるにおい、お味噌汁のにおい、お湯が沸く音を感じながら、いっしょにごはんをたべ、いっしょに時をかさねていくことができる場。

ただいま。おかえり。いただきます。ごちそうさま。をいえる場ができればいいな。

とりあえず、来年度は、月二回、公民館で、たいしたもんはないけど、いっしょに食卓を囲める「ちゃぶだい」をスタートさせたい。 以上。

すすすすでの1年間

石塚 洋子

2018年2月、市民プラザ加須で、すすすす主催の湯浅誠氏の講演会があり、そこで貧困の現状についてのお話を聞きました。お話の中にあった、子どもたちとの関わり方として「いるだけ」でも意味があるということが私には特に印象的でした。「いるだけ」でもいいんだと自分に言い聞かせ、翌3月にすすすくの活動に加わらせていただくことにしました。

木曜日の学習支援の場には小学生から高校生までの子どもたちがいて、各自がその日にやる勉強を決めます。私は仕事で英語を教えていたことがあります。が、すすすくで子どもたちが質問したいことは英語とは限りませんし、英語であっても、教え方や学び方が自分の経験してきたものと異なる場合があります。子どもたちがどのような学習をしているのかが前もってわかり、私が準備できていれば違った説明や分かりやすい例文などが示せたかもしれないと思うこともありました。他の教科・科目については、分からないことを聞かれて、戸惑うこともありました。子どもと一緒に考えることは楽しく面白くも感じられます。質問がなく、そもそも英語を勉強する子がいないという状況で所在ない日もあります。一方、時に子どもによっては、勉強をしたくて来ているわけではなさそうでした。おしゃべりが多かったり、勉強道具を持って来ていなかったり、学習に取り組むのが遅いなどということがあったからです。諭したり、叱る場面もあり、現在はひとところよりも落ち着いて全体的に静かで取り組みが良くなったと感じられます。ただ、身だしなみや化粧などで気になることがあります。学校そのものではないので不問にした方が良いのか、雰囲気作りや周囲への影響を考えるとやはり働きかけていく方が良いのか、悩ましいところです。

子ども食堂では、私は調理スタッフの一員として、食材を切ったり食器を洗ったりということなどを行っています。調理室では、離乳食対応、アレルギー対応、場合によっては支度をしている間にも必要な分量が増減する事などにも対応しながら、やがて良いにおいが漂い、限られた時間の中で、大人数分のおいしく安心して食べられる温かくて十分な食事が用意されていきます。朝早くから新鮮なお野菜をたくさん収穫してくださっている丸山先生、メニューや段取りを考えたり食材の準備などをされている浦部さん、鈴木さんのご苦勞がしのばれます。調理にあたるのは、気ぜわしい場面もありますが楽しいことです。最近、スタッフ全員が最初は調理にあたることとなり、以前よりも余裕を持って準備ができるようになったと感じられます。

すすすくの活動に加わらせていただいてから1年ほどが経ちました。スタッフの皆さんのおかげで楽しく充実して過ごすことができます。初めてのことやわからないことがまだまだ多い私ですので、そこに居て自分でできることを考え、学びながら、これからも関わらせていただきたいと思います。

今、子ども食堂が必要とされていると言いますが…

戸恒 和夫

すくすく広場のスタート

2016年、私が、大震災と東電原発事故で双葉町から避難された方たちを加須市内で支援する、加須ふれあいセンターの会員として活動していたころ、その3・11の直後から「ぴえろのあそびひろば」を立ち上げて双葉から子どもたちへの支援を続けておられた坂本佳代子さんや金谷京子さん、和田すみ子さんと出会ったのが始まりでした。

私と赤嶺さん・浦部さんら何人かの方たちと「加須で子ども食堂のようなものを始めたい」と語っていたのが、坂本さんの耳に入り、ふれあいセンターの方たちも入って相談する会をもったのが6月のことだったと思います。

坂本さんは「ぴえろの…」のとりくみの中で「双葉から子どもたちが大きくなったり、いわき市へ転居したりで参加が少なくなる中、加須市内の子育て中の方たちが、どうも、『たべる』ことに惹かれて参加する傾向が見える」と指摘され、「対象を市内に拡大し、子育て支援に焦点を置いた活動が必要とされているように思います」と語られました。

戸恒らは、『格差拡大・貧困の問題』というけれど、どのような形で支援の必要な子どもさんたちと出合っていけるのか」「ご飯を作って一緒に食べることに自信もあるが、その前後に何をするのか」「親たちとどのような関係を作っていけばよいのか」「何か事故や、問題が起きた時にどう対応できるのか」など、日頃から抱いていた不安を交々に出し合いました。

その後もこの話し合いを重ねた結果、①8月からふれあいセンターをお借りして練習の会を始める②ぴえろのあそびひろばに加須のメンバーが参加して一緒に体験を積む③一般社団法人すくすく広場を立ち上げて、「ぴえろのあそびひろば」を引き継ぐ——ことになりました。

こうして丸山綱男さんが提案した「あそぶ・まなぶ・たべる」をキャッチフレーズに、地域での子育てを支援すること、あちこちに近所の力で運営する小さな子ども食堂をつくることを目的に掲げ、2016年12月23日に設立総会を開いて一般社団法人すくすく広場が発足しました。

スタッフは子ども食堂に関心のある市民(＝ベテランの子育て経験者)を中心に、保育士、幼小中高大の元・現教員、臨床発達心理士、栄養士、社会福祉士らが混じって会員となり、実践の傍らで常に一層の研修を積み、市内での広報にも力を入れ、あるべき姿での行政との共働を心がけながら活動を進めています。

主な活動は、毎月1回の「すくすくのあそびひろば」(あそびと食事)開催と、毎週木曜夕方に開く小中高生勉強会(無料学習支援)ですが、他に毎月運営会議と研修会を兼ねた「すくすくサロン」(会員以外も自由参加)を開き、会員間の相互理解と問題意識の共有を図りながら、年に2回は、市民対象の講演会を開催

してきました。

現在正会員 38 名、賛助会員 31 名。スタッフは全員無償のボランティアですが、その会費と、市民の方々からの寄付と市からの補助金で運営しています。またフードバンクの機能も果たしていこうと研究中で、埼玉県内の子ども食堂ネットワークに加盟して情報交換をしています。

この中で、願いが叶い、17 年 12 月には加須市南町に吉田さん夫妻を中心に「つくしの家」という、文字通り「近所の力」で運営する小さな子ども食堂が誕生して、すくすく広場とも密接な関係を保ちながら、毎月第 2・第 4 金曜日に活動を楽しみながら継続しています。

2 年間の実践から見えて来たこと

さて、あそびのひろばや、学習支援、子ども食堂の実践を始める前には、多くの人がそうであるように、「よく言われるような子どもの貧困というのは、本当にあるのだろうか?」「どうやって子どもを集めるのがいいのか?本当に困った子が、来てくれるようになるのだろうか?」「もしケガや、食中毒の事故が起きたらどうするのか?」と言った疑問や不安がありました。これらの疑問は、今も、たくさんの人々が関心を持ちつつも実現に踏み切れないでいる大きな原因になっています。

しかし、「つくしの家」の様子を見ると、「貧しい」とか「困っている」とかの一文字も使わないまま、「必要とする子たち」にもきちんと出会えていることがわかりました。特に驚いたのは、5・6 年ほどのしっかりした子らが、私らの「思い」を以心伝心、なぜかしらちゃんと汲み取ってくれていて、自然な形で友達を誘ってきてくれることでした。さらに、スタッフも、どこかから探したりしてくるとかではなく、とにかく「近所の力で…」と、ご夫妻が腹を据えて続けていることで、一人また一人と、足りてくることがわかりました。なぜそうなるのかは、どなたかの分析を待つしかありません。でも、兎に角そうなることが確かな事実です。

また、ある姉妹は、両親が共稼ぎで遅くに帰宅するまで、お金だけを多めに預けられて過ごしていて、見かねた近所のおばさん（会員の一人）が、自分の孫娘と一緒に勉強会に通うようにしてくれています。でも、宿題には、大人たちが立ち入ることを拒否し、間違っている、ただ分量をこなせば、あとは「終わったからもういいんだ」と図々しくふるまうのですから、私たちスタッフも久しぶりに（？）あれこれ知恵を絞り合って悩むのですが、「硬軟あって良い。なにせどの子も大切にして、支え続けることが一番」と話し合っています。ここには、「十分に手をかけられて来ていない子」のつらさが見えるからです。このようなことも、始めたからこそ実感できることで、「見えなかった」のは「見ないようにしてきたから」にほかならなかつたことを感じます。

私たちの活動を聞いた近所のおばさんが、「私だって、向かいの子を時々呼び

込んで、おやつをあげたりしているんだよ…」と話してくれました。実はこれこそがすでに「近所の力」で、子ども食堂は、それ以上でも、それ以下でもないのだとわかります。また、今でこそ子ども食堂は「流行り」ですが、長年地域で活動してこられた婦人会の方などに聴くと「そんなの今に始まったことじゃなく、戦後しばらく、私らがしょっちゅうやっていたことだよ」とのこと。こうした先輩方の経験に敬意を払い、素直に学ぶことが必要だと思いました。

大切なのは、昔にあった近所の力を地域に取り戻すことで、子ども食堂はそのきっかけになればよいのだと思います。そういえば、私たちも皆、振り返ってみると、小さい頃や、子育てに忙しかったころ、ご近所や、同級生の家庭にも助けられてきた思い出を持っていて、それが今、この活動に関わる原動力になっていると語り合うことが多いです。

今、行政との関係をどう作るのが問われている

ところでこのところ、埼玉県では子ども食堂がブームと言って良いくらいになって来ました。それというのも県知事のお声がかりで、「子ども食堂を800に増やす」との動きが始まっているのです。

早く言えば1つの小学校区に1つ以上の子どもの居場所を作るということで、例えば、県営団地の集会所に調理施設を整備したり、高齢者のデイケア施設をそのまま利用するなどしたりして、選定・委託を受けたNPOが運営し、午後からの時間帯に夕食提供を含む子どもの居場所づくりをする。さらには、学研、ベネッセ、シダックスなどの大企業にも参入してもらおう—などが、そのモデルとされています。これには老人と子どもとの出会いの効果(?)云々も加えられているのです。

また、県内のたくさんの企業が、食品や資金の提供をしやすいように、昨年11月26日には市民たちと企業を出合わせる県主催の大規模なフォーラムが大宮で開催されました。このように、県が予算化し、企業も参入するとなると、一気に「各小学校区に1つずつ」というのが現実味を帯びて来て、子ども食堂ができる速度も、経営効率や危機管理の手法も格段に向上すると期待されているのです。

しかし、一方でこの動きには少なからず疑問が生じてしまいます。それは、せっかくの手作りの小さな子ども食堂の運動が、大切にし、頼りにしている「近所の力」が、かえって損なわれてしまうのではないかという心配です。

「もう出来ているのだから、何もアンタらがやることないんじゃないの?」とか、「心配な子が居たらあっちに行かせればいい。専門家に任せる方がいいに決まっている」とか、「何か問題が起きたらどうするの!」とか、「どうせアンタたちもお金をもらってやっているンでしょ…」とかの冷ややかな声が、(例によって?) 充満してしまい、せっかくの「あたたかいごはん」から、肝腎の「手をかけ、こころを通わせる」という暖かさの意味を失わせてしまうのではないか…という心配です。

私たちが子ども食堂にかける思いは、近所のおじいさん、おばあさん、おじちゃん、おばちゃん、若者たち、子どもたち、お互いが子ども食堂をきっかけに知り合って、町の中で手を振り、声をかけ合い、時にちょっとずつ支え合える「近所の力」「地域の力」を取り戻すことにこそあるのだと思います。

それには、面倒な部分をさっさと行政や企業に任せてしまっただけではいけないのです。子育てに面倒さはつきものです。この面倒な部分にこそ、楽しみと励まし、大人も一緒に成長していける種が隠されているのですから。また、「近所の力」は、昔の隣組がつつい権力の手先になって果たしてしまったような力であっては絶対にいけません。行政に頼りすぎ任せすぎではいけないことは、平和な生活を守るためにも欠かせないことなのは、もう常識なのですから。

そうは言っても、「少しの費用の補助」「問題が起きてしまった時」の対応など、後ろから、行政が支えとなって欲しい役割はありつづけます。幸い(?)なことに、羽生や加須、つまり県北の地区では、県の南部に比べて、子ども食堂の数も圧倒的に少なく、市の行政もこうした県の気ぜわしい動きにはまだポカンとしている(?)状況です。ですから、実は今のうちに、私たちが追求しているような「近所の小さな子ども食堂」を市民の手であちこちに作る運動を広げ、それを後方からゆったりと支えることについて、市の行政と丁寧に話し込んでいくことが、今、いちばん必要なことと考えています。

市民が働き、行政が支える。これこそが、真の意味の市民協働社会なのですから。(了)



寄稿 羽生の杜と私

田村 信征

(NPO 羽生の杜 理事・事務局長)

はじめに

私は羽生に越してきて 5 年目を迎えます。越してきたころ地元で知っている方と言えばわが NPO 立ち上げの中心的存在であった故小田原紀雄さんのお連れ合いさんだけでした。以後、活動を継続するなかで沢山の出会いを経験してきましたが、なかでもお隣の加須市で活動されていた一般社団法人「すくすく広場」の戸恒さんとの出会いは特別な意味合いがありました。個人的なつながりはもとより、すくすく広場として羽生の杜（森）でのイベント企画で継続的にご利用いただいたうえに社団のお仲間にも参加させていただき多くの学びと経験をさせていただいたからです。その学びのなかから多くの刺激を受けて、私ども羽生の杜も今年から「子ども食堂」を開始することになりました。以下、現状における子ども食堂に対する私の問題意識を述べて原稿依頼への務めを果たしたいと思います。

1、羽生の杜設立の意図

以下の文章は私が昨年理事長に就任した折に羽生の杜ホームページに掲載した文章ですが現在も変わらない思いであることからここに再録したいと思います。

「故人となった小田原紀雄がこの羽生で居を構えてから 40 年以上になります。彼はここを拠点に北は北海道から南は沖縄まで全国を巡って、この社会が抱えるさまざまな矛盾に正面から向き合いそれに抗いながら戦っている人々とその闘いを共にする生き方を貫きました。

弱者に寄り添いながら、その射程は差別されている人、生きづらさを強いられた人、不当にも政治的な弾圧を受けている人、弱っている子どもたちなどそのかかわりの範囲は限りなく広く、また深いものでした。晩年に近い 5 年ほど前に生涯をかけてかかわり続けた課題をここ羽生で実現しようと彼の志に賛同する多くの者たちも協力して 1500 坪の土地を購入しました。その後も相変わらず肉体的に相当な負荷を抱えながら全国を飛び回って活動を続けていた小田原紀雄はその思いを成し遂げることが叶わないまま 2014 年 8 月 23 日に帰らぬ人となりました。無念としかいいようがありません。

残された私どもはその遺志をつなぐべくここに NPO 法人「羽生の杜」を 2014 年 10 月に設立いたしました。一つひとつの現実の問題は、弱っている

人々を自己責任などというたわごとで特に高齢者や子供たちにしわ寄せされております。この NPO はそのような課題を担っていきたいと思っております。」

この思いは羽生の杜に関わる私の原点でもあり、この遺志をどう実現して行けるかが私どもの課題であると自覚して活動しております。

2、子ども食堂への取り組み

今年は羽生の杜の活動を開始して 4 年目に入りますが、1 月から「子ども食堂」を開設しました。もともと子ども食堂は経済的に困窮する子どもたちに食の場を提供するという目的で始まった活動で今や全国規模で広がってます。確かに貧困は子どもたちの学力低下やいじめ、虐待、不登校などにつながる素因になっていると言われてますが、これらの事象は現在の日本社会が生み出した格差社会という現実から必然的に発生したものと言えます。そこの根本的な原因を見据え解消することを同時に課題としてとらえる必要があると思いますし、私自身は「子ども食堂」はその課題に取り組むうえでの小さな入り口でしかないと認識してます。

3、行政の取り組み

埼玉県は子ども応援ネットワークを立ち上げて積極的に「子ども食堂」活動を推進・助成しております。知事の号令一下、県内の小学校区 800 か所に一つ子ども食堂を作ってゆくために社会福祉協議会や子育て支援課などを中心に精力的な動きを見せております。そのこと自体過少に評価するものではありません。湯浅誠さんによれば、明らかに赤の信号をともした状況の前の黄色信号の段階で民間のできる「子ども食堂」の役割があるとの指摘は頷けるところではあります。因みに黄信号とは経済的に苦しいけどそのためにわざわざ行政の窓口に相談に行くのをためらっている方々のことで、貧困が見えない存在と言ってもよいかもしれません。そして赤信号とは専門家が介入して行政が救済に乗り出さなければならない方々のことを言っております。7 人に一人の貧困という場合この赤信号だけでなく黄信号の方々も含まれての数字ということで、この黄信号の方々こそ NPO などの民間が「子ども食堂」として取り組める課題であるとの指摘です。

これを高齢者の介護の問題に置き換えて考えてもよいと思いますが、医療費の国の負担を軽減するために要支援から要介護までを数値化してできるだけ早いうち対処しましょうというのに似ております。医療費のかさむ重度な症状に至らないうちに対応して、高齢者自身の負担を軽減し国の高額医療費の抑制を

図るというものです。子どもの貧困問題は本来政治や行政がしっかりと取り組むべきことと思うのですが、現状ではまずは民間のボランティアな精神に頼って立ち上げていき行政はその後押しをするという構造になっているように見えます。つまりは行政の補完的な役割を担うということになるのです。高齢者の介護はその意味で十分とは言えないまでも一定のセフティーネットが敷かれていると言えます。しかし子どもの貧困に関しては行政としても未消化の段階にあると言えるのではないのでしょうか。私としては子どもの貧困問題も行政としてNPOなどの民間の取り組みに先駆けてしっかりしたセフティーネットを構築していくべきではないかと考えます。コンビニなどの参入（協力）も含め企業の参画などは一定の評価ができると言えますが、行政としてのガイドラインを整備できないままでの参入は、発生すかもしれないリスクにどのように対応するのか不安が伴います。もちろん非営利や営利であっても新しく始めようとする事にはリスクが伴うのは同じと言えますが、営利を前提とする企業の場合の社会貢献にはしっかりと行政との約束事が必要に思います。

4、羽生・子ども食堂の課題

羽生で「子ども食堂」を始めるにあたり何人かの地元の方々との話のなかで羽生にそんな「子ども食堂」を必要とする子供たちがいるのですかと問われました。確かにその実態はなかなか見出しにくい面もあります。高齢介護に関しては身近な家族間問題であり、行政サイドにも制度化されたシステムがあるために、容易に見える化できる問題です。しかし子どもの貧困問題は必ずしもその性格上、あからさまにできない側面を持ってると言わざるを得ません。羽生という地域特性（地縁や血縁の強い地方都市）から考えても「困っている人この指とまれ」と言ってそのような方々が集まってくるとは容易に考えられません。

羽生の杜は丸 2 年にわたって「高齢者の高齢者による高齢者のための講座」を続けてきました。講座というツールを媒介に高齢者が居場所を見つけることができるのではないかと始めたことでした。そして一昨年までは春、夏、冬休みに子どもたちの学習支援と遊びの場として 10 数人の子どもたちが集ってました。この延長線上に子どもたちが安心して集い食を一緒にできる居場所を作っていこうと考えてました。残念なことに担当者が体調を崩して中断してしまいましたが、今年から「子ども食堂」として再出発することができました。ここは誰もが集える地域交流の場として門戸を広くして受け入れることを目指します。高齢者も子どもたちもシングルマザー、シングルパパも障がい者も外国人家族も一緒に集い食を共にする交流の場を作る。その集う場からいろいろな課題を見つけていきたいという思いです。それは子育て、食の確保と安全、地域の課題、

不登校など思いもかけないいろいろな課題が提示されるのではないかと考えています。もちろん課題解決は大事ですが、それよりその課題を共有化して一緒に悩み考える場を作り出していくことが大事ではないかと考えます。その意味で「子ども食堂」はそこに集約される諸問題解決のための入口にしていきたいと思っています。以上の考えに基づいてこの活動を私どもは「みんなの食堂」と銘打ってアピールしてゆきます。

5、むすびにかえて

個人的な話をさせていただきます。私の母は私が小学4年の時に筋ジストロフィーと診断され、それ以来、母子家庭で一人っ子であった私は母親の面倒を見る日常になります。長い時を隔てて、私の妻は糖尿の合併症から失明をして人工透析に週3回通いながらの生活をしておりました。その後、大腸がんになり人工肛門を取り付けて入退院生活を送ることになり18年間の闘病生活を強いられました。重い障害を生きた母親と妻の傍らで経験したことは今の私の生き方に大きく影響していると感じています。私は障がい者について考えることは健常者について考えることであると常々感じてきました。すなわち、「障害は障がい者個人の特質というだけでなく、人と社会の相互作用のなかで生じるから」(佐々木実)なのです。重い障害を抱えた方を見るとお気の毒にと憐れんでしまう気持ちは率直な感覚と言えますが、しかしそのような憐憫の情は排除の思想に転化する危うさをはらんでいると渡辺一史さんは指摘しています。私自身多くの方々から助けていただいて生きてきましたが、他方でその同情が障がい者を忌避する気持ちと重なって見えることもしばしば経験しました。福祉という働きが陥りやすい陥穽ではないでしょうか。私としてはここに集う方々と共に生きる喜びを感じ響き合う関係を作る。そんな居場所を目指していきたいと思っています。(了)



子どもはちょっと誇らしげであった

坂本 佳代子

午前中に、紙飛行機作りを行った。子ども達は当然のことながら、楽しげに出来たての飛行機を持って廊下で飛ばしている。本来子どもは自分が飽きるまで、いつまでも飛行機を飛ばしていたいのだ。

ところが大人にはスケジュールがあり、飛行機を作ったら次はお昼ご飯、その後で庭に出て飛行機を飛ばそうとの段取りができています。大人と子どもの決定的な違いは、作ったら即遊びたい子どもの心と、ご飯を食べる時間くらい待てるだろうとの大人の心との食い違いである。

だから4歳と覚しき坊やは「いやだ。飛行機飛ばすの、外に行く」と頑として自分の思いを譲ろうとしない。お母さんは困っているようだったので、私は傍に行って

坂本「ご飯食べたいなあ、一緒にご飯食べたいなあ」と小声で話しかけた。

坊や「嫌だ！飛行機飛ばすの！ご飯食べない」

坂本、頷きながら笑顔で「ご飯いっしょに食べたいなあ。食べてから飛行機飛ばしたいなあ」

坊や「やだ！飛行機とばすの！」

坂本、少し悲しそうな顔と声で「ご飯食べたいな。いっしょに食べたいなあ」

坊や、笑いながら「いいよ、ご飯食べる。それから飛行機とばす。」

坂本「うん、そうしよう」

このやりとりは、私に幸福感をもたらした。私は説得や示唆は一切していない。できなかった。なぜなら、子どもの主張の方が自然だと思うからである。飛行機は作ったらすぐに心ゆくまで飛ばしたいのである。そのような設定をこそ大人はしなくてはならなかったのである。だから、私は子どもにお願いするしかなかった。

子どもは、ずいぶん早く私の願いを受け入れてくれた。そのことに驚いたのである。4歳といえども、自分の主張の他にも人の思いがあることをしっかりと認識できていると言う事だ。そして食事時間であることも理解し、この状況下でどのような行動決定をしていくことが望ましいかを、子どもは主体的に考えたのである。

私は、子どもが我慢したのではなく、納得してご飯を食べる選択をしたことが嬉しかった。

子どもはちょっと誇らしげであった。

私も幸せであった。

伸びしろに期待

杉沢 正子

3月19日、信号待ちをしていたらいきなり追突された。中国からの留学生たちを招き、楽しい2日間を過ごして加須駅に送った帰りのことだった。事故処理の間、夫と二人で寒空に立たされながら「長いこと生きてると、色んなことがあるわね～」と話していた。

半年ほど前にも思いがけない経験をした。全くあずかり知らぬ書類に、私の住所氏名が記され押印までされて、公的機関に提出されていたのだ。事の顛末を知り、謝罪を受けたところである。友人に話したら「それはひどい。立派な犯罪よ」と激怒されたが、幸いにも発見が早かったので、大きな被害を受けることがなくて良かったと思っている。

2年前の私だったら、どちらの事件も納得いくまで相手を追究していたと思う。全く非がないのに、なぜこんな目に遭うのかと怒りが込み上げてきただろう。けれど、今、私は不思議なほどに心穏やかだ。すすく広場で子ども食堂や学習支援に参加しているうちに、心の中に、理不尽なことも一旦受け入れる場所ができた。自分自身の変化に驚いている。

子どもは、どんな境遇に生を受けても、懸命に生きていかなければならない。これほどの理不尽はないと思う。けれど、子どもたちは運命を受け入れて必死に生きる力を身につけようとしている。嘆いたり怒ったりしている暇はないのだ。そんな子どもたちが少しでも笑顔になるようにと思って関わっているうちに、彼らが何かを気付かせてくれたのだと思う。

私にもまだまだ伸びしろがあるようだ。この出来立てのやわらかな心の部屋が、これからどう育っていくのが楽しみだ。

広めたい映画『こどもしょくどう』

丸山 綱男

社会の歪と希望を描く映画『こどもしょくどう』、主題歌作詞は俵万智



岩波ホール（東京都千代田区神田神保町 2-1 岩波神保町ビル 10F）

2 週間先行ロードショー3/23～4/ 5（金） ※関東地方では2 館のみ

映画『こどもしょくどう』が 2019 年 3 月 23 日から東京・神保町の岩波ホールほか全国で順次公開。

◆作品タイトル：『こどもしょくどう』

出演：藤本哉汰、鈴木梨央、浅川蓮、古川凜、田中千空／降谷建志、石田ひかり／常盤貴子、吉岡秀隆

監督：日向寺太郎 脚本：足立紳、山口智之 撮影：鈴木達夫 照明：三上日出志 美術：丸山裕司 録音：橋本泰夫 主題歌：「こどもしょくどう」作詞／俵万智 作曲／谷川公子

◆今や全国 3,000 か所以上まで広がったと言われる子ども食堂をテーマに、『火垂るの墓』の日向寺太郎監督と、『百円の恋』の足立紳の脚本で、社会は子どもの純粋な想いから変わるかもしれないという希望を描いた、子ども食堂が誕生するまでの物語。

ダブル主演の藤本哉汰、鈴木梨央らの瑞々しい姿、定食屋を営むユウトの両親を演じる吉岡秀隆と常盤貴子の温かい眼差しが心を打つ。

◆藤本哉汰と鈴木梨央のダブル主演で、子どもの目線から現代社会の貧困問題を描いたドラマ。「火垂るの墓」「爆心 長崎の空」の日向寺太郎が監督を務め、脚本には「百円の恋」「14 の夜」の足立紳が参加している。

映画に登場するユウト（藤本哉汰）は、食堂を営む両親と妹と健やかに暮らす小学 5 年生。幼馴染のタカシ（浅川連）は母親が**育児放棄**で、家に帰っても一人ぼっち。ユウトの両親はタカシを心配して、頻繁に家に招いては夕食を食べさせていました。

小学 5 年生の高野ユウトは食堂を営む両親、妹とともに何不自由ないおだやかな毎日を過ごしていた。幼なじみのタカシの家は母子家庭で、タカシの母はわずかなお金を置いたままほとんど家に戻ってくることはなかった。そんなタカシを心配したユウトの両親は食堂に招き、頻繁に夕食をごちそうしていた。

ある日、ユウトたちは河原で父親と車上生活をしているミチルとヒカルの姉妹に出会う。彼女たちの境遇を気の毒に思ったユウトは実家の食堂に姉妹を連れて行き、2 人にも食事を出してほしいと両親に願い出る。そして数日後、姉妹の父親が姿を消し、ミチルたちは行き場をなくしてしまう。ユウト役を藤本、ミチル役を鈴木が、食堂を営むユウトの両親役を吉岡秀隆、常盤貴子がそれぞれ演じる。

◆「こどもしょくどう」製作委員会

人によっては現実離れした設定に思えるかもしれませんが、実際はそうでもありません。

まもなく終わる平成は「失われた 30 年」ともいわれ、経済が停滞し、貧困や格差が広がったといわれます。日本の貧困についてはニュースでもよく報じられていますね。具体的なデータを見ると、厚生労働省発表の「子どもの相対的貧困率」（2015 年「国民生活基礎調査」）は 13.9%にのぼり、なんと **7 人に 1 人の子どもが相対的な貧困状態**にあります。貧困といっても、昔のように服装

やニオイで明らかにわかることはほとんどなく、見た目は普通。周囲が気づくのが難しいため「**見えない貧困**」という表現もよく使われます。

■近所に貧困の子どもがいたらどこまで関わるべき？

ユウトは、ミチルやヒカルを家に連れてきて、両親に食事を出してほしいと頼みます。両親は怪訝に思いながらも姉妹に食事を食べさせます。ユウトの母・佳子（常盤貴子）は姉妹を心配し、何か行動したほうがよいと考えます。一方、ユウトの父・作郎（吉岡秀隆）は、ごはんを食べさせるくらいはよいとしても、事情がわからないのでとりあえず様子見でいいだろうという姿勢。夫婦の間で意見が割れ、口論になっていました。

個人主義で地域社会とのつながりも薄い現代では、作郎のように「首を突っ込みすぎないほうがよい」と考えるのは、むしろ自然なことかもしれません。余計なことをして親に逆恨みをされたくないし、面倒なことに巻き込まれたくないと思えば、「**家庭ごとの事情があるだろうから**」と行動しない理由づけをするのも簡単です。

ところがそんな両親に、あるときユウトは「見ているだけで何もしていない」と怒りをぶつけます。もちろん、両親は何もしていなかったわけではありません。両親はミチルやヒカルに何度かごはんを食べさせていたし、心配もしていました。

大人の視点では十分関わっているように見えますが、場当たりの対応だけで根本解決への行動を起こそうとしないのは、ユウトから見れば何もしていないのと同じことだったのです。

「見えない貧困」は、言葉のとおり見えないから想像しづらいものです。でもだからこそ、身近な人や地域が動かなければ、そのままだれにも気づかれず、ときには最悪の事態を招くことも。

最近は貧困に限らず、「もうすこし周囲の大人が気にかけていれば…」と感じる悲しいニュースも目にします。映画の中にもそうした悲しい結末を想像させるようなシーンがあります。

■「子ども食堂」の存在意義とは？親として大人としてやるべきこと

子ども食堂はすばらしい活動ですが、本当に温かい食事を必要としている貧困家庭の子どもや親に来てもらうことが難しいという課題もあります。

開催は月に1~2回の開催というところがほとんどなので、そもそも貧困に苦しむ子どもへの食事支援と考えたとき、十分とはいいづらいかもしれません。とはいえボランティア等による運営なので、運営費や運営スタッフの確保も大変です。

ただ、ここでひとつ忘れたくないのが「子ども食堂」の存在意義はおなかを満たすだけではないということ。親が忙しく夕食を1人で食べる子どもにとっては、子ども食堂は楽しい集いの場になりえます。俵万智さん作詞の映画の主題歌も、誰かと食事を共にする楽しさを歌っています。俵さんは歌詞に込めた思いを「食べるという命に直結する行為で、大人から子ども、社会が繋がっていく姿が素晴らしいと感じました。なのでそこに焦点を絞りつつ、自分自身の感想・感動、この映画からもらったものを自分なりに言葉でお返しする、そんな気持ちで歌詞を書きました」と語っています。

タカシも、ミチルやヒカルも、家庭環境が複雑で、それが貧困につながっています。いまは親であっても自分の人生を生きやすい時代。仕事やパートナーとのかたちも多様で、いろいろな生き方が尊重されてしかるべきですが、そのしわ寄せがはたして子どもにいていないか、ということは立ち止まって考えることも必要なかもしれません。ニュースで子どもの貧困を知っていても、その状況に置かれている子どもたちの気持ちや有り様にまで想像を働かせるのはとても難しいこと。この映画を観ると、どこか人ごとだった「子ども食堂」や「見えない貧困」についてもうすこし自分事としてとらえられるようになったり、自分のすぐ身近に困難を抱えた子どもがいる可能性を想像しやすくなったりすると思います。

子どもたちは社会の未来であり、希望。その子どもたちを守るのは私たち大人の大切な役割であることにあらためて気づくと同時に、何をすべきか考えるきっかけをくれる映画です。

◆作詞 俵万智

歌人の俵万智は「率直にこの映画から受けた感情を大事にしたいなと思いました。食べるという命に直結する行為で、大人から子供、社会が繋がっていく

姿が素晴らしいと感じました。そこに焦点を絞りつつ、自分自身の感想、感動、この映画からもらったものを自分なりに言葉でお返しする、そんな気持ちで歌詞を書きました」とコメントを寄せた。

歌詞：「食べることはいのち食べることはつながり食べることは温もり」という歌詞が印象的

◆作曲 谷川公子

こどもしょくどう・・・に描かれたものは、いまのニッポンの抱える歪みの一つであり、と同時にあらゆる歪みの調律に行動を起こすきっかけが、まずは無関心を克服すること、と教えてくれる。

食べることは命・・・、さらに、ニッポンの《食べること》を支える産業と文化にも、何が大切かを気づかせてくれる小さな一歩であってほしい、のです！
をサウンド・トラックにも込めました

◆舞台挨拶の時に日向寺太郎監督が話していた言葉、

「今の社会を作ったのは大人の責任なので、こども達には責任はない」
僕も子ども食堂を回らせてもらって、同じ様な事を感じました。
でも、今の社会が普通なんだ、仕方ないって思っている子ども達ばかりです。
映画「こどもしょくどう」を通して、「子ども食堂」と向き合う様になってまだ2ヶ月です。しかし、自分なりに考え、想う事は日々多くなっています。
家で子どもだけでご飯を食べること、家に居場所がない子ども、貧困の問題、子どもを取り巻く色んな現代社会の問題は簡単に解決できるものではないと思います。でも、僕にできること。辛い思いや寂しい思いをしている子ども達の助けになる事はできるかな

永遠瑠マリルリーズさん講演



2月10日(日) パストラルかぞ
主催 一般社団法人すくすく広場
後援 加須市 加須市教育委員会
加須市社会福祉協議会

「大切なもの 命・平和・教育-子どもたちの未来のために」 ～ルワンダの悲劇から学んだこと～

みなさんこんにちは。出会いが出会いを作ってくれました。生きていれば一番の宝物が出会いです。久喜からの倉持さん、関口さんに出会って、戸恒さんとながつながって、今日のすくすくの講演会に招待されました。この出会いを宝物に変えたいと思います。大切なもの＝命。毎日感じてらっしゃると思うんですが、脅かされることが無い中で、平和教育として子供たちの未来のために、伝えていきたいと思います。どこへ行ってもこのスライドから始まります。

全ての子どもが学校に行く日本

ルワンダの場所、分からないですよ。日本へ26年前に来て、ショックだったこと、小学校の時に世界地図を見て、アジアの三つの国 日本・中国・インドを知りました。日本に驚いた。すべての子どもが学校に行く。ルワンダでは、すべての子どもたちが学校に行けるわけではなかった。分かるか分からないかによって進学できるかできないか。留年させてくれる親はいない。しっかりと覚えました。日本の島は「いくつに分けられていますか」その四つ。それを名乗ってくださいというように、暗記するのが主な学習。日本の地理。中学生の時に、日本の歴史を学びました。世界的に知られていることとして、広島・長崎の原爆、中学一年の時に学びました。戦争の残酷さを学びました。広島・長崎で原爆が落とされたとき、子供はどうしていたか。

気候も食べ物も素晴らしいルワンダ 内戦を乗り越えた今ぜひ来てほしい

ルワンダは発展途上国で日本とは約五十年の交流があります。ルワンダの銀行もその一つです。1985 年高校卒業して初めての銀行振り込みを受けました。日本によって作られた制度です。日本からの ODA の支援を受けています。バスが主な支援です。日本の皆さんもルワンダのことを知っているだろうと。一目見てどこですか。ルワンダと言うと、衝撃。「どこにあるの?」こんなに日本のこと知っているのに。何事もなければ分からない。ところが、26 年前来て、みんな知らなかったのに、大虐殺の後「あれ何族ですか?」。虐殺の国になった。寂しいです。いいルワンダを紹介して皆さんに来てもらえるようにしたいです。この会場にも 5 人がルワンダに来ていただいている。来年はぜひ大勢に来ていただきたい。赤道直下でも快適です。赤道より南、ウガンダ、タンザニア、飛行機で一時間。キリマンジャロのコンゴ民主共和国の隣りです。四国の 1.4 倍。福島県の 2 倍。住んでいる人数 1100 万人。人口密度 429 人、ヒトヒトヒトです。産業は主に農業です。鋤で耕す農業。気候はとっても恵まれています。夏になると暑いと思うでしょう?福島で初めて 30 度体験しました。ルワンダではせいぜい、25~27 度、昼間は 22 度。標高 1000m~2500m なので、気温は快適です。坂の国でもあります。アカゲラ国立公園に野生動物がいます。行っても、会えたり会えなかったりです。動物ですから。マウンテンゴリラツアーが一番人気があり、高価です。飛行機代分の予算ぐらいかかります。それだけ、保護されているわけです。美しくおいしい食べ物があります。豆を使った料理やお芋の料理、バナナ料理です。お米も食べられますが、高いです。日本で毎日ご飯を食べられて幸せです。美しく、素晴らしいものがあるルワンダですが、25 年前大虐殺がありました。もともと王国だった。言葉が一つ。ルワンダ語しかなかったにもかかわらず。民族争いは、言語の違いが当てはまらない。食文化も変わらない。結婚も変わらない。結納は牛一頭と決まっている。すべて文化同じ。違いは、権力争い。王様の指導でまとまっていた。ところが、植民地支配になりました。最初ドイツ。ドイツはこの国の制度を尊重した。ところが、第一次大戦にドイツが負けた。次はベルギーの植民地になりました。そしたら統一から分裂に進んでしまいました。信じられない分断政策。鼻の高さで民族が違った。財産で民族を変えた。背の高さ低さ。さらに兄弟同士でも別民族。政策として発行した身分証明書や所属の証明書。これらの証明書が殺される基準になってしまった。それから言葉。フランス語を導入することで、王様とエリートが学ぶ権利を作った。フランス語を学ぶことで溝が深まってくる。ルワンダを分けてしまった。独立の時にベルギーに 1959 年に王様が倒されてしまう。悪口を広められて、選挙で負けてウガンダに逃げた。サポートする人達も逃れてしまった。国には帰りたい。みんなも国に帰りたくても帰らせてもらえなかった。難民生活になってしまった。愛国戦線というゲリラ組織ができて、1990 年 10 月 1 日から入ってきた。これが内戦の始まりになりました。戦いをしているときに和平交渉に参加すること

を勧められる。1990～1993年に交渉が失敗。1994年、大統領が和平交渉に参加して、まとまって、合意があった。書面までして。ところが大統領が乗った飛行機がミサイルで撃墜された。一瞬に二人の大統領が殺されてしまい、犯人が未だに分かっていない。1994年4月7日から大虐殺が始まった。そのニュースは全世界に広がった。三か月間五十万人から百万人の犠牲者。政治のありで、仲良くしていた人が殺し合う。今現在、復興が成し遂げられています。ルワンダの女性が大きく関わっています。世界的にも女性国会議員が多い国。世界中に知られている。今は安心してお出かけできる国。今日は皆さんが聞きたい体験をお話しします。

ホームステイで覚えた日本語

今、53歳。大変なことを乗り越えると、素晴らしい出会いがあります。日本語ができるきっかけは、高校卒業して、専門学校の教師になった。洋裁を教えた。小学校卒業できる子供は少ない。多くは、途中で学校をやめていく。一人歩きできるためには、色々な勉強ができる場所が必要です。日本のODA、人材育成の一環として、青年海外協力隊。20歳になった若者が生活しながら技術を教えるジャイカの制度。協力隊として、働いて日本に来る制度があって、日本の技術指導を26年前に受けられた。行くことは考えられなかった。神様が私たちを助けるために行かせてくれた。その時は九か国から集まった。福島を受け入れ先。福島行ったらフランス語・英語教える先生はいなかった。「三か月は自分で日本語を学んでください」と言われた。日本語学校へは毎日通った。その中で、ホームステイが人生を変えた。幸せだった出会い。八十歳の彼女は愛情たっぷり。厳しく。彼女は、二か月間で日本語しゃべれるようになることを県に約束したんでしょう。最初は『どうやって暮らすんでしょうか?』一晩は何もしゃべらなかった。『明日どうなるんでしょう。』朝の目覚めの驚き。朝こたつに座って朝刊を呼んでいた。感動した。ビックリした。複雑な気持ち。想像してほしい。受付を済ませた皆さん。もし文字が読めなかった自分を想像してみてください。私はおばあちゃんが読んでいるのを見てすごい複雑な気持ちでした。私は、母から53年間手紙をもらったことが無い。95年間文字の読み書きができない。今の私たちは、文字に支えられている。読みたいことはスマートフォンでダウンロード。本は国境を越えてどこへでも行ける。だけど、これを味わっていない人は多い。『母も読めたら、いいのになあ。』と心でつぶやいた。そこで私は、一生懸命日本語を勉強しようと気合が入った。おばあちゃんとはことん付き合ってくれた。日本では、学校で、一人ずつ教科書を配られた。子供のようにうれしくてはしゃいだ。母国で、高校まで卒業しましたが、自分の教科書は初めてだった。ルワンダでは、先生だけ教科書を持っていた。まとめて黒板に書く。ノートに写す。全部の子供にノートはない。無い子は、授業中に言葉一つ漏らさずに必死で聞いている。帰宅後の

お手伝いの後、練習する。足し算を書いて消す。学期ごとに、試験がある。友達の家泊まって、ノートを書いた人から借りて勉強する。また、さらに感動したこと。ある時家に手紙が来た。市役所から来た手紙。「息子さんは就学年齢」ですと、外国人であっても日本人であっても全員入学する義務(権利)がある。ビックリしました。昔からあること。入学すると空っぽのランドセルで行って、教科書いっぱいにして帰ってくる。

帰国して内戦勃発 自分を助けたのは・・・。

ホームステイでは、アルファベットの世界から来たので、やるしかない。ひらがなの「あ」を書いたら、おばあちゃんが機嫌悪くなった。理由は、書き順がある。日本を作ってきた精神。書き順には厳しい。ひらがな・カタカナ。今は何とかなる。漢字はダメです。一生懸命、絵で描いて説明。意味わかってくれて言葉で返してくれた。話したいことを絵で描くと文にして返してくれた。きちんと二か月後に日本語話せるようになった。愛情たっぷり、厳しさほどほど。いい塩梅で。楽しかった二か月間。アパート暮らし。必ずルワンダに来てねと約束した。でも、約束を果たせなかった。ルワンダ帰国二か月後に内戦勃発。1994年4月6日、普通の日でした。今日の夜で、今までの生活が送れなくなることを想像してください。その日は朝起きて仕事に行き、夕方終わってサヨナラのあいさつ。三十人の仲間、今生きているのは五人。どんな死に方をしたのかもわからない。戦争の恐ろしさ。生活が止まってしまった。爆弾ミサイルの音。真っ暗になった。停電。電気は戻らなかった。ランプで三人の子供とご飯を食べた。怯える日々が始まった。何が起きているかもわからずに。七時間の時差。ルワンダで大変なことが起きていると日本から電話。大統領が暗殺された。大丈夫ですか。三日目は電話も通じない。切り捨てられた。夜間でも明るい。爆弾。朝、怯えて仕事に行く余地がない。音が聞こえたら殺されてしまう。「笑わないで」と子供に言う。これが実態です。一週間後隣に爆弾が落ちた。家を出る決心をしました。誰にも相談ができない。二歳児をおんぶ。四歳六歳、ハンドバックをもって。神様がいることを信じて。ハンドバックに蓄え。安全を求めて。でも、あるわけない。こんな光景を見たことがありますか。日本では避難所サポートしてくれる人はいます。でも、ルワンダでは歩いて、見ての通り、男の人どこにいますか。どこにもいません。駆り出されているんです。戦争は絶対にあってはならない。歩いて、歩き疲れたら横たわる。一人が座ると、人がいるから安心する。そこが難民キャンプ。病気が発生する。国際社会が来る。世界がつながっている。自分の命をかけて助けに来てくれる。三人の子供を助けるために走る。でも、子供は親を信じている。親に向かって「おなかすいた。」言われても、何もしてあげられない。横たわって動けないこれが現実。ハンドバックに5000フラン。パンが売られていた。賞味期限過ぎカビ。奇跡的に食べて歩き出した。ところが、難民キャンプで赤痢

にかかった。難民キャンプで、「助けてください。」後ろから声がかかった。医師連絡協議会。災害が起きると先生が駆けつける。ひらがなを見た瞬間「通訳してくれますか」と頼まれた。「できる」と言った。ハンドバックの中に辞書が入っていた。テントに来られない人のためにも、言葉ができることは、日本の医師の助けになった。その後、先生から国会議員にたどり着いて、留学生ならば来られると、短期大学に受け入れてもらった。ハンドバックにパスポート。結婚していることや子供の名前書いてあることで、確認できる。日本に来ることができた。神様が導いてくれた。旦那は奇跡的に国境超える前に再会できた。1994年12月28日来日。難民キャンプから来たのは私たち家族だけ。留学生としての来日でした。安心して眠れた。日本に来て何にも恐れずに眠れたこと。本当に平和っていいな。当たり前っていうのが宝です。今日集まれるのも宝。孫にもひ孫にもこの平和がつながるように。この命を使って何かできるか。勉強したことが助けてくれた。学んだことがその人らしく生きられる。ルワンダに学校を作る。生活もままならないのに。でも、研修生で受け入れてくれた人が背中を押してくれた。あなたしかできる人いない。本当に教育は平和の力。ここで今の講演活動を始めた。十八年前、土台から始まって、二教室の学校。路上の子供も。「大きくなったら何になる?」に対して「私たちが大きくなるまで生きられるかな」が返ってきた。一か月後また聞いた。「大きくなったら先生になりたい」この夢、一人一人つかんでもらおう。パソコン教室や夢を見ているうちに、福島が大変になった。避難所で、子供たちが私を見ると、興味はあるが反応は、「日本語しゃべった。」「えー、英語もしゃべれるの」子どもは、世の中をよくする笑顔の力を持っている。避難所に通った。月一度仮設住宅にコーヒー紅茶をもっていった。みんなと楽しく過ごすことができるようになって千羽鶴をもって回った。三月十一日お祈りをした。

子どもたちの幸せを願って

夢が復活。給食室づくりができた。あれから18年、あの二教室から大きな学校ができました。180人が学んでいる。彼らたちこそルワンダを引っ張っている。女性の政治への進出。30%ある。世界でも多い女性議員。女性フォーラムができ、国自身が支えている制度。半分以上が閣僚の中で活躍している。また「アフリカの奇跡」とも言われています。日本の企業も支えている。首都から二時間離れると、一日の食事もし食べられない子供がたくさんいる。子供はみんな教育を受ける権利がある。親のプライドを傷つけないで、料理を食べさせたい。毎日必死で頑張っているのは何のため。子供たちがどこにでも寝られる場所を作りたい。子どもたちを脅かすエネルギーについて皆さんも考えてください。故郷に帰れないつらさを。みんな考えてみましょう。安心して眠る子どもを作りましょう。ルワンダの大統領、大人気です。住民がおなかをすかしていたら神様の前に出られないと言っています。教育受ければ限りの無い可能性があ

るんです。歌のプレゼント。ルワンダの子どもたちの「フレンズ」。今日も生きていればよい明日が来る。次の世代につなげる人になりましょう。お布団に入るときに思い出しましょう。

(記録 山口哲司)

